



第274号

公益社団法人
医学振興
银杏会

(編集同人)

荻原俊男 馬場幸子
杉本 央 富田尚裕
上田啓次 朝野和典
木村 正 森井英一
日比野浩 久保盾貴

94名医学士誕生

第97回 卒業式



令和7年度大阪大学卒業式が大阪城ホールで3月25日に開かれた。熊ノ郷淳総長は、歴史小説家の司馬遼太郎が大

阪大学の源流「適塾」の開祖である緒方洪庵の生き方を表した言葉『世のために尽くした人の一生ほど、美しいものはない。』から式辞を始められ、「こうした精神を受け継ぐ本学の卒業生としてのプライドを持って活躍してください」と激励された。続けて、『地域に生き世界に伸びる』という大阪大学のビジョンを挙げられ、「社会の課題に向き合う中からこそ、普遍的な学問が生まれ、世の中を変える成果へと結実します。このことを大切にして世界の最前線を目指してください。」と述べられた。

医学部医学科卒業式は同日午後3時より医学系研究科A講堂で行われ、94名の医学士が誕生した。石井優医学系研究科・科長は、「これからが真の学びの始まりであり、独自性を磨き、人に選ばれる存在となってください。阪大医学部の卒業生には次世代の医学・医療を担う責任と使命があり、その自覚をもって活躍してください。」と激励された。

野々村祝夫医学部附属病院長は、「医学の分野は驚くほどの速さで進んでおり、最新の情報に取り残されないようにすることが大切です。仲間とのつながりを大

切にし、大阪大学医学部を卒業したことに誇りをもって頑張ってください。」と述べられた。

最後に吉川秀樹医学振興银杏会(学友会)理事長が、第12代大阪大学総長の熊谷信昭先生の式辞の言葉を引用されて、「阪大医学部を卒業したことを誇りに思い、立派な医師として活躍してください。『立派』という言葉は、『派を立てる』という意味です。人真似ではない研究に取り組んでください。」と激励された。

令和7年度「楠本賞」は宇野魁志君に贈られた。「山村賞」は博士課程の山本悠司君と学部学生の榊溪君の2名に授与された。また、博士課程優秀者9名およびMD研究者育成プログラム修了者7名が認定された。

定期総会ご案内

開催日 令和8年5月30日(土)
開催場所 大阪大学医学部银杏会館3階
級会・支部交流会 正午～午後1時30分
総会 午後1時30分～午後4時15分
特別講演 「なぜ血液・免疫細胞は骨に囲まれた骨髄のみで造られるのか? -特別な環境(ニッチ)の実体をつきとめる-」
大阪大学大学院生命機能研究科
幹細胞生物学 教授 長澤丘司先生
開催方法 現地参加をお待ちしております。
オンライン視聴も可能です(4面参照)
懇親会の開催はございません。

病院長就任のご挨拶



坂田 泰史(平5)

このたび、令和8年4月1日より大阪大学医学部附属病院長を拝命いたしました。坂田泰史と申します。歴史と伝統ある本院の舵取りを任せられましたこと、身の引き締まる思いとともに、誠に光栄に存じます。私は、歴代の病院長が築き上げられた素晴らしい運営方針を継承しつつ、職員の皆さまと共に、新たな時代の大学病院の姿を構築してまいりたいと考えております。

現在、大学病院を取り巻く環境は、臨床・教育・研究のいずれにおいても極めて厳しい状況にあります。しかし、困難な状況下であっても、私たちは大阪大学病院が本来目指すべき「先進医療」を確実に実現できる体制を、盤石なものにしていかなければなりません。

私は、本院が先進医療を支え続けるための本質的基盤として、「Safety, Stability, Synergy through Co-creation」という「3つのS」を掲げます。

1. Safety (安全)

病院の中での「安全」とは、医療安全はもちろんのこと、働く職員の労働安全、さらには防犯対策を含む幅広い対象がございます。これまでの取り組みをさらに強固なものとし、誰もが安心して過ごし、働ける環境を堅持します。

2. Stability (安定)

持続可能な医療提供のためには、経営の安定が不可欠です。稼働率の向上やコスト削減を推進するのみならず、多角的な収入源の確保にも努めます。また、

努力している部門には適切なインセンティブを付与するなど、めりはりある運営を目指します。

3. Synergy (相乗効果)

一つの部門の力だけでは、新しい

医療は創れません。未来医療開発部やAIホスピタル、バイオバンクといった既存のインフラをさらに強化し、学内の各研究科や本部、そしてOCR-netを軸とした関連病院との連携を深化させることで、大きな相乗効果を生み出したいと考えております。

これら「3つのS」の推進には、痛みを伴う改革が必要な場面もあるかもしれません。しかし、私たちが本来の役割である先進医療を追求し、次世代を担う教育インフラを維持するためには、避けては通れない道です。日々の行動をもって「信頼」を積み重ね、国民からの支援に値する組織であり続けるために、全職員と理念を分かち合い、この難局を乗り越え、真の大学病院の目標に向かって邁進していく所存です。

皆さまの温かいご支援とご協力を、心よりお願い申し上げます。

寄附御礼

令和7年11月11日から令和8年4月15日までに、20,100,000円のご寄附を頂き、誠に有難うございました。公益社団法人への移行に伴い、平成23年4月1日より当会へのご寄附は個人・法人とも税金控除の対象となっております。また、令和3年7月14日より当会は、寄附金に対してより有利な控除である税額控除制度が選択できる団体として認定されました。詳細に関しては、事務局までお問い合わせください。

吉川 秀樹 先生(阪大医 昭54) より、100,000円をご寄附いただきました。

岸本 忠三 先生(阪大医 昭39) より、20,000,000円をご寄附いただきました。

当会へのご寄附について

当会は平成23年4月に公益社団法人となり、それ以来、会員の先生方より当会の公益事業に対する多額のご寄附をいただいております。ご支援ありがとうございます。

当会へいただいたご寄附は、基本的には当会の公益事業全般(下記の事業すべて)に使用させていただきますが、下記より支援する事業をご指定いただくこともできます。

- (1) 研究助成奨学事業：医学部学生・院生や医学研究者に対する奨学金支給・研究助成を行います。
- (2) 知識普及啓発事業：新入生対象の医学史研修や一般市民対象のシンポジウム、学術雑誌(学友会会誌)の発行を行います。
- (3) ネットワーク強化事業：医療関係者対象のシンポジウム

や、メールマガジンにて臨床・教育情報の発信と交流を行います。

また当会へご寄附いただいた方に対しましては、あらかじめご意向を伺った上でお名前や寄附金額を学友会ニュース等に掲載させていただくとともに、当会規定に基づいて理事長よりお礼状や感謝状をお送りさせていただきます。また併せてお送りする領収書は税金の控除手続きに必要なので、お手元に保管いただきますようお願い申し上げます。

ご寄附の申し込みやお問い合わせは事務局[電話06-6879-3501(平日8時30分~17時15分)、またはoffice@ichou.med.osaka-u.ac.jp]までお願い申し上げます。

<受賞>

ベルツ賞 第62回 山縣和也 (昭62) / 上原賞 竹内 理 (平7) / 日本国際賞 審良静男 (昭52)

<代議員候補選出のご報告>

代議員選出管理委員

前号の学友会ニュースに同封した代議員候補者について、本年1月に行われた信任投票の開票ならびに集計を2月4日に行った結果、不信任票数が正会員総数7,176名の5%を超えた候補者はありませんでした。よって候補者309名全員が次期の代議員候補に選出されました。

「新入生諸君、阪大医学部の原点で歴史を学ぼう！」

阪大医学部の新入生が母校の歴史を知り、母校に対する誇りや同窓の仲間意識が高まることを目指し、学友会では体験型の医学史研修を平成29年より行っています。会員の皆様のご寄附と、教務課、適塾記念センター、在学生各学年有志のご協力を得て、医学史の講義と適塾の見学として入学式の直後に例年実施しており、本年は4月4日(土)にあいにくの小雨まじりでしたが満開の桜のもとで行いました。

エル・おおさか大会議室で行われた医学史講義では、渡邊幹夫教授(平5)の司会で馬場幸子先生(平16)が、源流である適塾から阪大医学部の現在に至る歴史と、先輩方の医学・医療への貢献を紹介しました。適塾の見学では、島田昌一名誉教授(昭61)と森井英一教授(平4)が建物と展示物を紹介しながら、当時の適塾をとりまく状況、緒方洪庵先生のこと、適塾の教育、塾生の生活などを解説しました。医学をはじめとする蘭学を苦学して学び、日本の近代化を牽引した多くの塾生が切磋琢磨した学びの場を目の当たりにして、新入生の皆さんからは歴史に感銘を受けたという声が多くあがっていました。同窓の先輩が築いてきた伝統を引き継ぎ、さらに未来を切り拓く使命を胸に刻んだものと期待します。

新入生の適塾への移動にあたっては、在学生の皆さんが安全かつ円滑に公共空間を誘導してくれまし

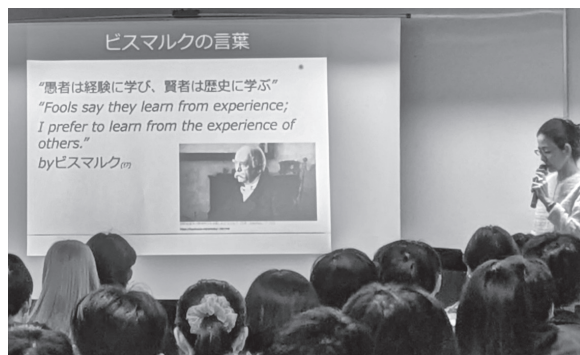
た。研修の実施にあたってご協力いただきました多くの皆様に深く感謝申し上げます。 三好智満(平5)



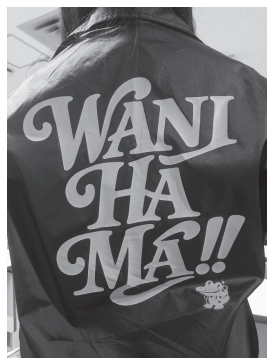
島田教授による新入生への説明(学部4回生溝口万葉さん撮影)



森井教授による新入生への説明(学部4回生溝口万葉さん撮影)



馬場先生による医学史講義



2026年度版
わにはまスタッフブルゾン

第7回岸本基金奨学生同窓会総会・発表会開催報告



令和8年3月21日、岸本基金奨学生同窓会の第7回総会及び発表会が最先端医療イノベーションセンター棟において開催されました。本同窓会は、「大阪大学岸本国際交流奨学基金」の奨学金及び「医学振興銀杏会 岸本基金奨学金」を受給した正会員と、本同窓会の活動に貢献した名誉会員から構成され、421名の会員のうち38名が出席しました。総会・発表会は渡部健二医学科教育センター教授(平6)による司会のもと進められました。名誉会長である岸本忠三先生(昭39)は、挨拶の中で、若手医師が医学部卒業後に研究室を経て海外留学へ進む機会が減少している現状に言及し、「若いうちに外の風に触れることは極めて重要である」と述べられました。続いて、石井優医学系研究科長(平10)・華山力成同窓会会長(平11)によるご挨拶、河盛段医学科教育センター准教授(平8)による事業報告が行われました。続いて、現役奨学生3名による発表会、奨学生OBの藤本康介微生物病研究所教授(平22)による特別講演が行われました。終了後は、銀杏会館内の「銀杏クラブ」にて意見交換会が催され、石井優研究科長のご発声で乾杯し、開宴しました。岸本先生の周囲には学生会員が途切れることなく集い、積極的に歓談する場面が印象的でした。名誉会長・同窓生と奨学生、さらに奨学生同士が懇親を深める有意義な会となりました。馬場幸子(平16)

総会オンライン視聴のための事前登録方法



https://us06web.zoom.us/webinar/register/WN_KLc42vJIS0avqD1YZWMA-w

2026年医学振興銀杏会総会
2026年5月30日 01:30 PM
大阪、札幌、東京



QRコードをカメラで読み込んで頂くか、ネット環境でURLを入力頂く、この登録画面が出て来ます

ウェビナー登録

| | |
|----------|-------------------|
| 名 | 学友会 |
| 姓 | 花子 |
| メールアドレス | office@ichou.med~ |
| 卒業年または学年 | 平成5 |
| 出身大学 | 大阪大学 |

登録

すべて入力したら、登録ボタンを押す

配信に使用するZoomは国際表記で日本語で入力の場合は、姓名が逆に表示されますので、「名」に苗字「姓」に名前を入力して下さい

ウェビナー登録が完了しました

2026年医学振興銀杏会総会
2026年5月30日 01:30 PM
大阪、札幌、東京

参加登録はこれで完了です。登録したメールアドレスに登録確認メールと、開催日前日にリマインダーメールが届きます

医学部長通信 第30回 石井 優 (平10)

テロワール

ワインはブドウとテロワールで決まると言われます。この「テロワール (terroir)」とは、フランス語の「土地 (terre)」を語源とし、ブドウが育つ土壌の性質や自然環境を総合的に表す言葉です。石灰質の土地からはミネラル感のある硬質なワインが、保湿性の高い粘土質の土地からは芳醇な果実味のワインが生まれます。さらに、水はけや斜面の向き、日照条件、風向きといった様々な要素が重なり合い、その土地ならではの個性を形づくります。同じブドウ品種であってもテロワールが異なれば全く異なるワインが生まれ、ブルゴーニュの銘醸ワイン、ロマネ・コンティの苗木を日本に植えても同じ味わいは生まれません。ヨーロッパの銘醸地のテロワールは、中世の修道士たちが数百年にわたり土地を観察し、試行錯誤を重ねながら見出ししてきたものです。一杯のワインには、先人たちの知恵と情熱が静かに息づいています。

近年、科学の進歩はワイン造りにも大きな変化をもたらしています。ブドウの全ゲノム解析は科学的な品種改良や醸造技術の発展を可能にし、ブルゴーニュの土壌成分を質量分析によって解析し、同様の組成を人工的に再現してブドウ栽培を試みるワイナリーまで現れています。しかし、テロワールとは単に土壌だけで決まるものではなく、長い年月の中で培われてきた栽培文化など、多くの要素が複雑に重なり合って形成されるものであり、ブルゴーニュワインの味わいはやはりブルゴーニュという土地でしか生まれません。ブドウの品種は改良できても、土地の記憶とも言えるテロワールを人為的に作り出すことは容易ではないのです。

このことは大学にも当てはまります。大学や学部にはそれぞれ固有の歴史や立地、国内外における役割、得意とする学問分野など、長い年月をかけて醸成されてきた価値があります。そこには、その場所に集った研究者や学生の情熱、学問への志、そして数多くの挑戦の歴史が積み重なっています。言わば、それぞれの大学・学部には固有の「テロワール」があり、それが独自の学問の発展と人材育成を支えてきました。

もちろん、大学が未来に向けて変化し、挑戦を続けることは極めて重要です。しかし同時に、変化の中で失われてしまうものにも目を向けなければなりません。大学組織の大きな変革が求められている今こそ、これまで多くの有為な人材を育て輩出してきた大阪大学医学部の豊かなテロワールを守り、それを未来へと継承していくために、私たちは知恵を絞る必要があります。

トピックス

放射線治療について

放射線治療は主にがんに対する治療法であり、日本における放射線治療を受けるがん患者は年々増加傾向です。その理由として、がん患者の増加、放射線治療技術の進歩、有効ながん治療として放射線治療が認知されてきたことなどが挙げられます。近年、高齢化が進むにつれ、合併症、全身状態低下等の手術が難しいがん患者が増加しています。放射線治療は、このような患者に対しても、体の負担が少ない治療法であることが大きな特徴です。外来で通院治療することも可能であり、quality of life (QOL) を落とさずに治療ができます。また、治療後のQOLも保たれていることが多く、治療後に仕事を行うなどの社会復帰もしやすいです。更には、高齢者や合併症で手術や化学療法が難しい患者や、全身状態が良くない患者に対しても放射線治療を行うことが可能であり、「切らずに治す」治療として注目されています。

近年は、強度変調放射線治療 (IMRT) や定位照射、粒子線治療などの高精度放射線治療を行うことにより、正確な治療が可能となり、局所制御を上げるのみならず、合併症を低減することが可能となりました。当科は1990年度の開設以来大阪府を中心としてがん患者の方々に放射線治療を行ってきました。2025年5月の連休明けから統合診療棟 (新外来棟) での診療が開始され、放射線治療科は従来と比較して1.5倍のスペースで診療を行うこととなりました。更に、2026年度からはリニアックが1台

増えて4台体制となりました (図1)。大阪府においては今後15年の間に放射線治療の需要が2-3割に増えていくことが予想されています。当院においても、北摂を中心とした大阪府における放射線治療患者のニーズにこたえていく必要があります。今後とも、高度先進医療を担う阪大病院に正確な診断・治療を提供することにより、患者さんの診療に貢献できるようにしたいと考えています。

小川和彦 (平3・千葉大医)

リニアックの種類

大阪府：2040年 (2025年比)
放射線治療の需要が
2~3割増加の予測

旧棟 汎用機2台、定位専用1台



新棟 2025年度汎用機3台
2026年に汎用機4台



提

言

デジタルデータを社会の共有財産に

一年前の本稿では、「いのち輝く未来社会と2025年問題」と題し、開幕を控えた大阪・関西万博への期待と共に、テーマに掲げられた「社会の分断」という課題を引用し、共生への思いを綴った。実際に万博へ足を運ぶと、そこには期待を遥かに超える未来図が広がっていた。大阪大学の関係者が手掛けたパビリオンをはじめ、数々の展示は「分断」ではなく、多様な観点からの「共生」と「持続可能性」を具現化しており、その科学的実現への確信を得ることができた。Expo '70が描いた未来が、50数年後の現在、想像を絶する規模で現実となったように、今回の万博が描いた未来図も、今後、私たちが想像もしない形で社会に実装されていくに違いない。実際、生成AIが日常生活に入り込んできたスピードは加速度的であり、わずか1年で景色が一変したという進歩の実感に照らせば、10年後にはその未来図が実現していることすら大いにあり得る。

デジタルデータは質量ともに飛躍的に増大し、AIによる応用範囲も格段に広がっている。昨年の当会シンポジウムでは、高度救命救急センターでの会話をリアルタイムでテキスト化し、電子カルテへ自動記録するシステ

ムの開発状況が紹介された。こうした技術革新は、2026年度診療報酬改定での医療DX推進体制整備算の拡充や、医師の働き方改革に資するAIによる文書作成支援への評価の先につながるものである。さらには、診断や治療支援へと発展し、AIホスピタルの基盤、人手不足の中での安心・安全な医療の支援につながるであろう。

一方で、診療会話を含む全データのデジタル化は新しい問いも投げかけている。年初のNew England Journal of Medicine誌に「Digital Exhaust or Digital Gold? The Value of AI-Generated Clinical Visit Transcripts」と題した記事が掲載された。医療過誤への懸念から、確定データ以外を「廃棄物 (Exhaust)」として削除してしまう現状に対し、それらは品質改善や研究における「宝の山 (Gold)」になり得ると著者らは指摘する。既知の医療情報への照合に留まらず、一次データのままの会話や臨床データから意義がある新たな情報を抽出できるシステム開発の重要性は極めて高い。患者や医療者の個人情報保護しつつ、デジタルデータを社会の共有財産として活用できる体制整備が、今こそ強く望まれる。

楽木宏実 (昭59)



ニューヨークの浦島太郎より米国留学33年を振り返って

…その175

日本での心臓血管外科研修終盤の1993年初頭に恩師白倉教授からコロンビア大学のポスドクの話があり、1993年7月に渡米、3年間の研究期間中に永住者ビザと米国医師資格を取り、1996年7月から同大の心臓胸部外科で臨床研修を受け、1999年3月から外科医になりました。その後は心不全外科を中心に成人心臓外科をやってきました。その間の記憶に残る事件を一部述べます。クリントン大統領のバイパス手術、911テロ、コロナ禍、コーネル大学での心臓移植の開設などです。大統領の手術では第一助手を務め手術は問題無く術後経過も順調でした。術後に大統領やヒラリー夫人と会話する機会を得ました。911テロ時は補助人工心臓摘出・心移植中で、World Trade Centerへの攻撃の第二報目でテロと確信しました。ドナー心の到着が危惧されましたが、移植手術は無事に終了しました。ドナー心は通常隣州のprivate jet専用の空港から届きます。10分遅ければハドソン川を渡る橋が閉鎖され到着しないところでした。術後に病院から見たWorld Trade Centerの煙を上げる残骸は衝撃でした。コロナ禍ではニューヨーク周辺が感染中心となり、予定手術は無くなり手術室をICUにして麻酔用呼吸器で管理をしました。私も第一波のコロナに罹患しました。熱発で検査を受け翌日に陽性と判明し、当時有効だろうと思われた薬を服用しました。その薬には不整脈の副作用があるのみで突然死しなくて良かったと思いましたが、私は自宅療養でしたが、大阪大学出身の腹部臓器移植の加藤先生は重症になり心配しました。その後、心臓移植開設のために2021

年2月にNewYork-Presbyterian病院内でコーネル大学に移り、無駄に長い肩書きからわかる様に、今は主にコーネルで時にコロンビアで手術をしています。以下は病院の対応について感じたことです。コロナ感染爆発時の病院の対応は早く、リーダーからの適時適確な指示、必要な病院の改造、地方政府との綿密な連携等と、病院全体が危機に当たっていました。対応の開始や変更の判断も素早く感心しました。当時のCEOが引退時にコロナ禍は本当によく乗り切ったと感想を漏らしていました。心移植プログラムも毎週の会議で細部を詰めてUNOSの承認を得て成功させました。まだまだありますが、誌面の都合上ここで失礼します。

Stephen and Suzanne Weiss Professor in Cardiothoracic Surgery
 Department of Cardiothoracic Surgery, Weill Cornell Medicine
 Adjunct Professor of Surgery
 Department of Surgery, Columbia University
 Irvine Medical Center
 Surgical Director of Heart Failure, Heart Transplantation and Mechanical Circulatory Support programs, NewYork-Presbyterian Hospital

今回は、大阪大学大学院医学系研究科 器官制御外科学講座 泌尿器科学教授の野々村祝夫先生 (昭61) にお願

中 好文 (昭59)

| | | |
|---|---|---|
| 診 | 療 | 科 |
| 紹 | | 介 |

小児成育外科学

大阪大学小児成育外科学教室は、我が国の小児外科医療の発展とともに歩んできた長い歴史と伝統を有する教室です。昭和27年、植田隆先生によるヒルシュプルング病根治術および食道閉鎖症手術の本邦初成功、さらに岡本英三先生によるヒルシュプルング病の胎生期発生に関する研究にその源流を持ち、昭和57年に講座として開設されました。初代岡田正先生は静脈栄養・外科代謝栄養の分野を牽引し、2代目福澤正洋先生は小児がん・臓器移植、3代目奥山宏臣先生は小児内視鏡手術の発展に尽力されました。こうした歴代教授と医局員の努力により、新生児外科、小児悪性腫瘍、肝胆道疾患、小児移植、腸管不全、外科栄養、小児呼吸器、小児泌尿器、血管奇形などを網羅する、日本有数の「フルスペック」小児外科診療体制が確立されています。

現在の教室もこの伝統を受け継ぎ、様々な専門性を持つ小児外科医が連携しながら診療にあたっています。分野横断的なチーム医療を基盤とし患者さん一人ひとりに最適な医療を提供するとともに、地域医療機関との連携を大切にしながら、臨床・教育・研究のバランスの取れた発展を目指しています。

小児外科の大きな特徴は、胎児期から新生児期、小児期、さらには成人期まで、長期にわたって患者さんに関わる点にあります。出生前診断を基盤とした胎児治療・周産期医療に始まり、新生児外科では食道閉鎖症や横隔膜ヘルニアなどの重篤な先天性疾患に対する集学的治療を行っています。さらに、小児腫瘍や胆道閉鎖症などの肝胆膵疾患、腸管不全に対する栄養管理や移植医療、直腸肛門奇形、血管奇形の長期フォローアップやトランジションなど、専門性の高い診療を幅広く提供しています。

診療面においては、一般的な疾患から「ここでしか受けられない」高度な専門治療を要する疾患まで幅広く対応し、胎児治療、新生児集中治療、移植医療、腸管不全、血管奇形、二分脊椎、表皮水疱症などに対して、多職種が連携したチーム医療を実践しています。また、

治療のみならず、成長や生活の質(QOL)を見据えた長期フォローアップを重視しています。さらに、内視鏡手術やロボット支援手術などの低侵襲手術を推進するとともに、成人外科で確立された新しい治療技術の導入にも積極的に取り組んでいます。

研究面では、日々の診療から生まれる課題を出発点として、基礎研究および臨床研究を行っています。脊髄髄膜瘤に対する妊娠中期母体開腹子宮開放胎児手術の臨床研究をはじめ、胎児低侵襲手術、周術期管理の最適化、術後長期予後の解析などにも取り組んでいます。また、再生医療や組織工学の分野では、気道や横隔膜などの機能再建を目指した研究を進めるとともに、低侵襲治療のさらなる発展に向けた手術手技やデバイス開発にも取り組んでいます。

さらに、大学と関連施設が連携した多施設共同研究体制を構築し、疾患レジストリの整備や臨床データの蓄積・解析を通じて、エビデンスの創出を進めています。若手医師が早期から研究に参画できる環境を整え、研究マインドを育むとともに、知識と技術の継承を重視した教室運営を行っています。加えて、AIを活用した手術動画解析や教育支援、診療の質向上に向けた取り組みにも積極的に挑戦していきたいと考えています。

ありがたいことに、医局には毎年新しい仲間が加わっています。それぞれの思いを大切にしながら、自主性と積極性を育み、一人ひとりが着実に成長できる教室づくりを目指しています。

大阪大学小児外科は、「命のはじまり」に関わる診療科として、患者さんご家族に寄り添う医療を大切にしています。これまで受け継がれてきた伝統を基盤に、新しい医療にも挑戦しながら、次の世代につながる小児医療を築いてまいります。

今後とも、学友会の先生方との交流を通じて小児医療により一層貢献できるよう努めてまいりますので、引き続きご指導・ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

渡邊美穂 (平11)

